

△対談▽

聖徳太子と日本仏教

中村元

三經義疏の真偽論

梅原 私から話を始めさせていただきます。

実は、私は六年ほど前から聖徳太子の本を書いている
わけです。十数年前に私は「隠された十字架」という本
を書き法隆寺怨靈説というものをとなえたのですが、そ

の説が一部の聖徳太子信者にとって、ある種の不快な感
じを与えたんじゃないかと思うんです。太子を怨靈だと

するのはけしからんというわけです。しかし実はあの本
は、聖徳太子はどういう人であるか書いてございません。

聖徳太子が死後百年後どのように祭られたかを書いたの
でございます。ああいう本を書いた以上は、次には聖徳
太子がどういう人であるかということを明らかにしなけ
ればならないという責務感が私の心中にあります。

六年ほど前から聖徳太子のことを書き始めて、それを大
体書き上げたのでございます。

それで、太子を年代的に順次論じてきたわけですが、
聖徳太子の晩年になりますと、例の三經義疏という問題
が出てきまして、その三經義疏が太子の書いたものかど
うかというのは大変むつかしい問題だと思うんです。私



梅原 猛（うめはら たけし）氏
大正14年生れ、京都大学哲学科卒業
現在、京都市立芸術大学学長。

こともありますし、義疏の和訳なんかも仲間と一緒に試みたこともございます。三經義疏が太子の真作かどうか

ということが今問題になっていますね。あれについて、私の立場はこうなんです。あの問題をみると、太子の真作じやないということを言おうとする人は、どうも政治的な意図があると思うんですね。つまり、今まで余り太子を上へ奉ることが多かつたから、引きずりおろそうと思って、太子の真作じやないという。今度、それに対して、太子の真作だと強く言う人は、それに縛られて、ある種の通念を権威づけようと思つていると思うんですね。けれど、私は歴史家の立場じやなくて、思

想史研究者の立場で申しますと、書物の中に書いてあることは、だれが言ったかということは、それほど問題にしなくてもいいと思うんです。そこに書いてあることがいいとかどうか。眞実を語っているかどうか。その方が問題だと思うのです。無論、歴史家にとっては、これを本当にAならAという人が書いたかどうか、これは大問題だと思います。そういう研究を決して無視することはできないと思います。しかし、思想というものは個人を離れていてもひとり歩きするものなのです。例えば古代の思想が現代にだつて影響を及ぼすことはあり得るわけです。

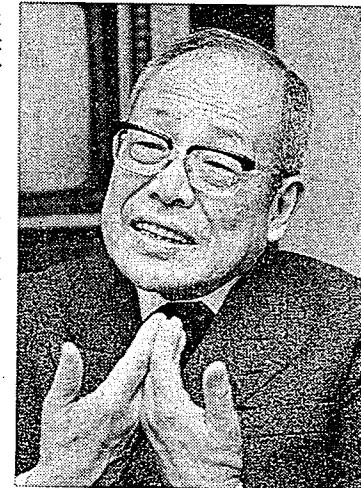
そういう立場から見ますと、日本人の大部 分の人が太子の真作だと思っていたというその事実は、歴史的事実として重要であると思います。それは書物の内容がいいか悪いかということは離れて、思想的事実として、これは重要なことだと思います。それが日本人の考え方などを解説するための一つの手がかりになると思います。それから、今度その中に書かれていることが果たして価値があるかどうかということですが、私は精細な研究

は正直に申しますと、聖徳太子についての本を書くまでは懐疑的だったんですけども、今度三經義疏を読んでみまして、太子の書いたという可能性が大変高いんじゃないかと思うようになりましたけれども、先生、いかがございましょうか。

中村 最初から問題をぶつけさせていただきました。怨靈説ですね。これは、私は勉強していませんから何とも申し上げられませんけれども、外国でも、スリランカでは、やはり王室の内部で争いがあって、王子が殺されたという場合に、その怨靈をなだめるためにお寺を建てたということがあります。ですから、怨靈云々ということは

の学者は、こういうふうにしてはいかんとか、地位も大部分危うくなっているとか聞きますけれども、しかし、純学問の立場から公平な気持ちでこの問題は検討すべきじゃないかと私は思っています。それだけのことしか申し上げられません。

それから、太子の思想、私は本当に素人ながら論じた



中村 元（なかむら はじめ）氏
大正元年生れ、東京大学印度哲学梵文学科卒業、現在、東方学院院長、東京大学名誉教授。

日本で重要な問題ですけれども、同時に、汎人類的な問題だと思います。それで、将来はそういう考え方が外國にあるのを、それと比べてみたら、日本人の怨靈の観念がもつとはっきり出てくると思います。

神道学の方でも怨靈説を最近唱えられた方がございますね。名前は言わないでおきましょう。これは西田長男さんのお弟子さんとして、非常に広い視野からリベラルな立場で神道思想を研究しておられる方です。その方の学的業績を私はまだよく知りませんが、わたくしは、西田さんの業績は幾らか検討し、話したことがあります。

それを受けて、そういう学者が靖国神社問題について、怨靈をなだめるためということを言われたというのは無視できないと思うのです。今政治的な理由のゆえに、その学者は、こういうふうにしてはいかんとか、地位も大部分危うくなっているとか聞きますけれども、しかし、純学問の立場から公平な気持ちでこの問題は検討すべきじゃないかと私は思っています。それだけのことしか申し上げられません。

をしておりませんから、ちょっと申し上げることはできませんでしたが、非常に簡にして要を得て、ポイントを突いていると思うのですね。

梅原 そのとおりですね。

中村 シナの書物は、それは元のお手本もあったかもしれないが、最近見つかったテキストなんかの類似が言われていますけれどもね。やたらに学殖を誇って、一つの漢字について、こういう意味もあり、ああいう意味もありとただ並べ立てて、じや、結局、それの要点は何だということを言つていないんですね。それは、このごろの日本の学者のやり方もちょっとそれに似ていると思うのですけれども、太子は、わからないことは凡愚の及びがたいところだと言つて、要点だけはぱっと出していりますね。このいき方というのは大したものだと思いませぬ。だから、真作かどうかは、私にはどうとも言えませんけれども、太子の論議の仕方というのものは大したもので、今の我々でも大いに学ぶべきものがあるのでないかと私は思つております。その意味で、三経義疏は今の日本人が取り上げる意義は十分あるものと考えて

おりますが、どんなものでございましょうかね。

梅原 おっしゃるように、政治的な立場で議論され過ぎたと私も思いますね。戦後は津田史学の影響が強いのですが、これが太子否定の一一番の激しい議論で、三経義疏どころか、十七条憲法まで否定されてしまつたんですね。

中村 そのようですね。

梅原 津田さんの立場は啓蒙主義の立場で、ヨーロッパでも十九世紀にはそういう啓蒙主義的歴史研究が非常にはやりまして、先生のご専門の仏教学でも、そういう立場から、いろいろ思いきった議論が出た。釈迦の実在を否定するとか、キリスト教でもそうなんでしょう。イエスの実在まで否定している。

中村 そうなんです。ブッダの実在を否定した人までいました。スナールという、フランスの一流の学者ですね。ブッダの存在を否定しまして、あれは天文神話だなんて言つうんです。それと同じですね。

梅原 そういう史学の日本における一つのあらわしが津田史学だったと思ひますけれども、大正デモクラシー

の思想的風潮の中でああいうのが出てきまして、どうし

ても偉い人間といふものはあり得ないんだと。日本書紀やその他で語られ、そして後にいろいろ潤色された偉大な太子という、つまり政治家としても超一級で、学者としても第一級だ、そんな人間といふのはあり得ないんだ。そういう偉人否定の気持が大正デモクラシー史学の中にあつたような気がしますね。そういうものを否定していく。三経義疏から十七条憲法にまで懷疑が及んだのです。その津田史学が戦後、戦後の歴史家に継がれまして……。

中村 繼がれましたね。

梅原 それで、古事記、日本書紀の神話なんかも疑われて、それと同時に、太子の実績に対して否定的な見解がどうも支配的だったような気がしますね。それで、私もどもどこかでその影響を受けまして、実は太子についての日本書紀の記事に対しても、十年前は大分否定的だったですね。「隠された十字架」のころは相当否定的だったですね。今度、もう一度ずつと太子の実績を検討し直すと、日本書紀の記事は、生まれたときにイエ

ス・キリストみたいな形なんですか。

中村 そうですね。そこから始まつたんですから。

梅原 死ぬときだけお釈迦さんみたいな死に方をして、そういう多少の潤色はありますけれども、大体重立つた実績は、そのまま太子の実績と認められるのではないか。認めた方が歴史を全体として説明するのにいいのではないかと今思つているんです。三経義疏につきまして、花山信勝さんは、大変おもしろい説をのべておられる。特に三経義疏は、太子自筆の文と称せられる。それが残つておられる。法華經義疏には非常に誤字が多いわけですね。仏教の小乗というのを少乗、すなわち少ない乗と書いてありますね。それから舍利弗でも舍利仏と書いてある。誤字が多いし、そして經典の根本解釈にちょっと問題点があります。にもかかわらず、實に教義を簡明に要約して、しかも、私はこう思うということを実にはつきりと言つておられるでしょう。

中村 必ず言われるんです。自分の考えをね。

梅原 そして、使つておられる註釈書は非常に少ないですね。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 だから、例の藤枝晃さんが敦煌本の中に、勝鬘經義疏と似ているという本を見出していく。だから三經義疏は聖徳太子が書いたものじゃないという議論を提出されましたけれども、私は、勝鬘經義疏を敦煌本と比べてみました

ましたが、しかし、それは確かにあれを踏んでいますが、必ずしも内容は一致しない、敦煌本にない思想が義疏にある。だが、勝鬘經義疏は敦煌本を底本としている。維摩經義疏には僧肇の本ですね。それから法華經義疏には法雲ですね。

中村 光宅寺法雲です。

梅原 そうですね。それを参考書で経典を非常によく理解して、向こうの誤ではこうであるがおれはこう思うという、日本学者に珍しいですね。

中村 そうですね。日本の学者にしては珍しいですね。梅原 大変、珍しいんですよ。

中村 全く今の学者でも珍しいですよ。

梅原 だから、私はそこから見て、著者は太子じやな

いかという、花山信勝先生の説は正しいと僕は思いますけれども……。

中村 私も何かそんな気がするんです。

聖徳太子解釈の独自性

梅原 先生は、その三經典の中でもそれが一番お好きですか。お好きと言つては、どうも……。

中村 特に三つのうちのどれということは申し上げにくうござりますけれども、痛切に響くような言葉がございましょう。あるいは、原典に対して批判的な言葉が述べられていますね。

梅原 日本の思想史の中では、ちょっと異例なことじやないでしようかね。

中村 日本思想史の中で異例ですね。あれだけ原典に對して反抗した解釈を述べている。殊に一つの例を申しますと、「山林に住む小乗の学者に近づくなれ」云々という言葉が法華經にあるというのですね。もとは「人々に近づかないで山林に住め」という文句なんですよ。それに対して聖徳太子の解釈は「山林に住むような小乗

の学者に近づくなれ、そんなことをしていたら、人々を救うよすががなくなるから」と、そういう言葉なんですね。

漢文というのはどのようにでも読めますからね。返り点のつけ方で変わるので。それは原典から見ますと、どうしたって山林に住む方を勧めていると思います。ところが、聖徳太子の解釈は違つて、「山林にならずでいいとはいかん。人々のために教化の活動をせよ」という意味にとつておりますね。これなんか全く独特として、私の知つておる限りでは、アジア大陸でこういう解釈をした人はいないですよ。

梅原 そうですか。

中村 そこに日本仏教の一つの方向づけが見られるような気がするんです。その後も、日本の仏教というのは、世俗の生活から離れないで進んでおります。それは、山林にこもるような行者さんもいましたけれども、全体のコンテクストは、世俗の生活と緊密に結びつくという方向をどついていたのです。たまたまそこに色合いをそえるために、山林に住んでいた人がぱっと輝いて光を当てられている。全体のコンテクストはそうだと思うんです。

梅原 そうですね。

中村 そうしますと、日本の仏教というものは、聖徳太子のときからそういう考え方を受けているということは言えますし、さらに明治以後の近代化の問題に結びつくと思うのです。ヨーロッパ以外の国々では、宗教が近代化を妨げたという問題があるわけですね。ところが、日本にはそれがなかつたわけです。というのは、世俗の生活の中に仏教を実現するという考え方があるわけですね。だから、近代化をむしる基礎づける方向に進んだと思うのです。今、日本人はよく働くということを言う。これが同時に産業を盛んにならしめた原動力になつていいわけでしようから、働くことの中に宗教的意義を認めていると思うのです。

ただ、金のために働くといふのは一概に言えませんけれども、自分は金もうけのために働く。そして、収入を得たら、そこでレジャーをエンジョイする。この二つを分けていわけなんです。ところが、日本人の場合には、それの両

方を渾然と一体化しているんですね。働くことの中にレジヤーの喜びがあると同時に、レジヤーも働くこと必ずしも分かれていない。だから、渾然としている。これが日本の近代化を大いに助けているんじやないでしょうか。

梅原 そうですね。山林も世俗の中に組み込まれるんですね。

中村 山林が世俗の中に組み込まれているんですね。

梅原 だから、聖なるものが山林にあるとすれば、聖なるものは、必ず俗なるものを浄化する役目をもつ聖なるものなのですね。

中村 そうなんですね。それは聖とか俗とかというのは、ヨーロッパの宗教学の仮に設けたカテゴリーですね。けれども、日本人の場合には、それが相即しているわけです。古くさかのぼりますと、大乗仏教の、殊にナーガールジニナのあたりまでいきます。輪廻と涅槃と異ならず、仏様はどこにましますか、この輪廻の移りかわる世界の中にまします。そういう考え方は、日本でも道元なんか強調しておりますね。ですから、それを受けているわけですが、一層現実的に展開したのは聖徳太子じやな

いでしょうか。

私は非常に特殊なことを申し上げますけれども、羅什の翻訳を検討したことがあるんですよ。例えば維摩経なんかを。そうすると、原文に比べまして、現実性、世俗性を強調している。そういう訳になっているんですね。つまり、チベット訳とか、あるいはほかの訳と比べてみましても、そう言えるのです。維摩経の原本で残っている部分は少ないんです。断片が十幾つかござりますけれども、その訳にも見られますし、チベット訳なんかと对照してみるとよくわかるんです。鳩摩羅什の訳というのは、現実性を強調しているわけです。だから、それが今度はシナ仏教を基礎づけている。さらに、日本へきて、聖徳太子によって一層現実性を持つて展開したということがあります。なるんじやないかと、ひそかに考えております。

梅原 勝鬘經義疏を読みまして、本当に久しぶりに私は感動を覚えましたね。太子の肉声を聞くようなものを感じましたね。先生の翻訳を参考にしながら読んだのでござりますけれども、勝鬘經というのは、なぜ太子が勝鬘經を読いたかというと、私どもが昔から聞いていたの

は、推古天皇が女帝だから、勝鬘夫人が語って、釈迦がそれを認めたという經典を、女帝のサービスのために書いたんだと、よくそういうことを言うんですね。

中村 よく学者はそういうことを言いますね。

梅原 そういうことがあるかも知れないけれど、聖徳太子の解釈だと、一乘仏教というものが説かれているのは、法華經と勝鬘經だけだということですね。これは、先生、そういう解釈はどこか中国にあるのかどうか……。

中村 私はよく存じませんが……。けれども、太子が三經を選ばれたということは大きな意味があるのです。とにかく大藏經には一万何千巻があるわけでございましょう。無数に經典がある中から、特にあの三つを選ばれたということは、何か意義がある——無論こういう議論があるんです。その三つの經典は、既に隋の時代までに読まれていて、太子はそれを受けたにすぎない、そういう解釈もあるのです。しかし、隋の時代までに読まれた經典はまだ他にたくさんあるのです。その中からわざわざなぜ三つを選んだかということ、これはやっぱり一つの太子の立場だと思うのです。それで、維摩經の立場と

いうのは、申し上げるまでもなく世俗仏教ですね。だから、出家仏教に対する反抗ですよ。出家するのに必ずしも剃髪し、衣をまとう必要はない。清淨な心を起こしたことろが道場である。それが出家であるという教えがございますね。それで、出家している修行者たちの方方がえってこだわりがあつて、悟りを得ていないという教えが繰り返しございましょう。そこに一つのポイントがあります。

それから、勝鬘經は、中に説かれていることは非常に哲學的で難しいですけれども、その立場というものは、二つの点で伝統に対する反逆だと思うのです。一つは、在家の人方が教えを説いたわけです。今まで……。

梅原 釈迦ですね。

中村 出家者がこれを説くわけです。

もう一つ女人が説くということです。これがインドではなかつたですね。古い時代にあつたウパニシャッドなんかを見ますと、婦人の哲學者が男子と堂々とやり合っている。それから、詩人などは婦人が非常に多いんです。けれども、仏教の教えを説くのは、まず出家者の男性で

したね。ところが、在郷で、しかも、女人である人が教えを説いている。お駕廻さんがそれをそうだ、そうだと言つて認められるという立場だったのです。これは二重の意味で革命的なことなのです。それをわざわざ聖徳太子を経て解釈されて、そこにまた自分の独特の表現がありますね。仏子勝鬘とか何とか。そこで、新たな展開を示しているというのは大したことだと思いますね。

梅原 当時、中国の仏教界は、南北朝から隋へということで、南朝の仏教は涅槃經中心の仏教でしたね。

中村 そうでした。涅槃經が非常に……。

梅原 それで、勝鬘經というものは、普通涅槃經の中に属していると見られているんですね。

中村 似たような思想ですからね。

梅原 ところが、太子の解釈は、勝鬘經というものは、法華經と並んで一乗經典だと。それで、彼は、もう一大乗という言葉をつくっていますね。

中村 そうです。

梅原 そういう勝鬘經は法華經と同じく一乗思想を説いたんだという解釈ですね。今の勝鬘經義疏の前半は、

一乗思想について論ぜられている。

中村 そうですね。

梅原 この一乗思想というのは、日本の思想を考えるときに大変重要なことです。

中村 そのころの日本思想にとって非常に大事ですね。

梅原 一乗仏教は最澄から始まるというがそうではない。太子から始まっているのですね。つまり、法華經中の日本仏教の性格をつくったのは太子だということになる。一乗仏教の先駆者が聖徳太子であり、聖徳太子がいなかつたら、最澄はいなかつたんじやないか。

中村 そうでしょうね。

梅原 最澄がいなかつたら日蓮はいない、日蓮がいなかつたら創価学会もないということになるんで……。

中村 日本仏教の大部分の宗派が比叡山から出ているのです。比叡山は法華經中心ですから、そうすると、勝鬘經を取り上げたのは聖徳太子だと思います。だから、勝鬘經というものは、従前はつけ足りのお經みたいに見られたんです。ところが、そこに深い意味があるといふことを指摘されたのは、やっぱり聖徳太子ですね。

日本思想における一乗思想の意味

梅原 それで、その一乗思想というのは、基本的に差別を説かない、平等を説くわけでしょう。大乗仏教の中でも小乗と対立する大乗の立場では差別が生ずる。一乗はこういう差別のない、すべての人間は平等であり、すべて成仏出来るという立場にたつ。これは日本の思想的伝統に非常にぴったりです。伝統的にそういう思想が日本にはあったと思います。それでその平等思想は日本では人間の平等どころか動物まで平等だという思想に変わつたと思うんですよ。これは、私はもう革命的なことだと思いますね。

中村 本当に革命的なことだと思います。西洋思想においては、異端者と正統派を分けまして、異端に対する憎しみが極端なんです。ところが、日本人の間では憎む思想が少ないですね。みんな救われれば仏の子であるといふのが一乗思想ですね。そこに一乗思想が働いていると思うんです。それがまたいい面ばかりとは言えないかもせんけれども、余り追及するということをやら

ないわけです。けれども、とにかくすべての人を包みますという気持ちが日本人の間に非常に顕著なんです。それを哲学的に基礎づけたのが一乗思想じゃないですかね。

梅原 そうだと思います。だから、日本の聖徳太子の仏教は、大乗仏教であって、そういうことも大きいですけれども、特に一乗仏教だといふんですね。これは、日本の思想的伝統に大変合った仏教だと思いますけれども、同時に、その後の日本仏教の性格をも決定してしまった。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 それと、例の法興寺すなわち飛鳥寺の大仏さんですよね。あれは推古十四年に作られていますが既に法興寺ができていたんですね。それは蘇我氏の寺であった飛鳥寺をそのまま国家の寺として仏像だけ入れかえたんだだと思います。最初に小さい本尊が入っていたんですよ。それを入れかえたから、入らなくて、堂を壊さずによく仏像を安置したというので、鞍作止利が褒められたんですよ。

そうすると、あの丈六の駕廻像というのは、一乗仏教との駕廻像で、本尊の入れ替えて今までの蘇我氏の仏教と

は違つた仏教なんだということを、太子は、あの仏像で示そなうとしたんじやないかと私は思います。

中村 そうですね。一乗思想というものは、太子によつてはつきり表明されたと言えましょうね。

梅原 しかも、一大乗という言葉は、誰もいわなかつたんじやないでしようか。

中村 大乗ということは言うんです。それから一乗も言うんですけど、一大乗ということは、サンスクリットの原文には出てこないと思います。

梅原 中国にもないででしょうね。

中村 私は調べておりませんが、ないと私は思いますよ。やつぱり聖徳太子の発明じやないですかな。

梅原 あれは法華經義疏になつて初めて出てくるんですね。

中村 そうですかね。

梅原 勝鬘經義疏の段階にはまだ出てこないんですよ。

法華經義疏になつて出てくる考え方として、だんだん一乘思想が展開していく、とうとう一大乗という考え方になります。一大乗という言葉は、本当に日本思想を解

明するキーになるような言葉であると思ひます。

中村 そうですね。日本人というのは、大体昔から包容的でしよう。それは異民族との戦争なんかもあつたと思いますけれども、とにかく全体を包含して、みんなばつさり殺しちゃうということをしなかつたんですね。これは西洋の場合と大変違うわけです。西洋では、異民族とぶつかると、もう異民族は徹底的に消されちゃうわけです。例えばローマとカルタゴとがぶつかった場合もうでしよう。全部もう奴隸にするか、殺すかした。それから、イギリスへローマの軍が侵入したといつたって、やつぱり同じことをやっていますね。ところが、日本人の場合には、内輪争いはあつたでしようけれども、何か最後には全体を包含するという傾向が、その後までずっと続いていましょう。だから、日本では、支配者が徹底的に殲滅されるということがあつたけれども、少ないと思います。

梅原 大変少ないので。親分だけやられて、あとはまた救っていくんですね。

中村 そうなんですよ。

梅原 それは一大乗という思想とどこかで通じる思想ですね。

中村 それは無意識のうちに一大乗があるんです。武将の中にさえも働いていたということが言えるんじやないですか。

梅原 だから、聖徳太子の憲法の中に、「和を以つて貴しと為し」というのは、一大乗というのとは裏腹だと思うんです。

中村 そうですね。裏腹ですね。本当におっしゃるとおりだと思います。日本の支配者の交代を見ても、前時代の支配者が一応存在を認められています。例えば足利氏というのだって、足利さんの子孫というのははずうと残っていました。それから織田の子孫もあり、徳川があつて……。徳川も徹底的に殲滅はしませんで、むしろ包容的でしたね。また、明治維新のときに薩長との対立があつたけれども、結局、最後は「和を以つて貴し」で解決していますものね。勝海舟と西郷隆盛との腹芸だって、やつぱり動機は「和を以つて貴し」となすだらうと思うのです。その後、ずうっと日本はその傾向が強いです。

梅原 だから、私は一大乗という言葉は、「和を以つて貴し」という言葉と結局同じ意味ですね。

中村 同じことですね。

梅原 だから、憲法十七条を太子の作と認めたら、三經義疏も太子の作であることを認めなければならないですね。

中村 そういうことになりますね。ただ、「和を以つて貴しと為し」の方がわかりやすいんです。それから、一大乗というのは哲学的な表現ですね。それは表現された場所が違うからですけれども、この思想は非常に重要なものです。将来、地球上の社会がだんだんとグローバルになりますね。その場合には、「和を以つて貴しと為し」という考え方方が地球的規模で重んぜらねばならないと思いますね。

梅原 僕もそう思ひます。つまり、人間と人間とも和を以つてということになります。

それから、人間と動物も和を以つて交わる。動物も植物にも同じ仮性がある。しかもそこに本質的な差別がな

いんだという、だから動物も植物も大切にしなければならない、それが一大乗の思想だと思うんですね。

中村 そうですね。これらは、外国の思想では必ずしもそうじやなかつたですね。動物なんていうのは人間に奉仕するものだから、ばつぱりやつて構わないという気持ちがかなり強かつたと思うんです。ところが、ある時期から、やつぱり動物愛護なんていう思想が出てきました、そして今日では、その動物愛護ということは、ある程度西洋人だつて認めるようになりました……。

梅原 しかし、愛護ではいかんでしょうかな。本来同じものだから……。

中村 本来、仏性はあるんだ。そこまではまだ……。

梅原 同じ仏性があるんだ。それまでは西洋思想はいかんですね。

生命の尊厳というときは、人間の生命の尊厳しか考えない。

中村 そうでしょう。

梅原 動物の生命の尊厳は考へないんですよ。我々毎日動物を殺して生きているんですから、尊厳を考へては

生きられないということはありますけれども、最初は一緒にものを、本当は殺してはならないものを食つているんだ、そういう考へがあるかないかはうんと違うわけですよ。

中村 違うと思ひます。それで、今おっしゃつたことは人間の本性に基づいているものです。人間が反省してみると、生き物だつて、やはり同じような生き物だから、同情の気持ちを持つて対すべきもので、もとは仏性を持っているものだという考へ方、これは西洋にだつてあつたわけです。ただ、西洋人が伝えないだけだと思うんですね。生き物を殺さないという思想は、ギリシャにでも部分的にありましたね。エンペドクレスなんかは、犬がほえていると、あれは、わしの過去の生存を思い出すと言つたとかと。

それから、アレクサンドリアの教父たちの思想ですね。

これは日本では余り研究されていません。異端の思想ですけれども、東洋の思想と多分に共通のものがあります。

それから、中世のフランスのカタリの徒というのがあります。これはキリスト教の異端ですが、十字軍の前

後からフランスに起つたはずです。それは生き物を殺さないんですね。それには摩尼教の影響があるというわけですね。そうすると、当時異端審問というのをやつたわけです。異端か、異端でないか、どうして見分けるかというと、鶴を連れてくるんですね。絞めてみろといふんです。それで、絞めたやつは、純粹のクリスチヤンだということで許されるんです。ところが、かわいそそうだといって絞めなかつたやつは、異端だといつて、火あぶりにされて殺されちゃつたわけです。西洋はそれだけ残虐なことをやつてゐるわけなんです。けれども、西洋ではそういう残虐な方が勝つたのです。しかし現在、西洋人にだつて、生き物を哀れむという思想を持つてゐる人がいるわけなんですよ。

それで、まだそういう傾向はずつと続いていると思ひます。例えば放生思想、生き物を放すと。あれは東洋、東アジアで頗るな儀式になりましたけれども、レオナルド・ダ・ビンチは、自分の趣味として、小鳥などのつかまつているのを買ってきて、そして放してやるんです。それが趣味だつたといいます。だから、途切れ途切れ……。

梅原 どこにあるんですね。

中村 やつぱり人間である限り、どこかにあるといふことが言えると思うのです。それで、今日は殊にアメリカでは、ベジタリアニズムというのが急に盛んになつてきました。あれは、やつぱり生き物を殺さないという思想ですね。キリスト教から出でてくるわけでもないし、論理実証主義から出でくるわけでもない。やつぱり人間に一種の仏性みたいなものがあつて、それが自覚めると、そのようなことになる。そこまでいきますと、東も西もないということになるかと思います。ただ、日本ではそういう自覚が早く起きたということです。

山川草木悉皆成仏について

梅原 そこでお聞きしたいのですけれども、例の山川草木悉皆成仏とか、ああいう考へ方は涅槃經にあるといいますけれども、違うんですね。あれは日本でできた考え方でしようかね。

中村 私はどうもそういう気がしますね。

梅原 気がするんですね。ちょっと違いますね。

中村 ちょっと違うんです。

梅原 つまり、すべてのものに仮性がある。悉有仮性という思想は涅槃經にありますからね。しかし悉有仮性と山川草木悉皆成仏というのは大分距離があるんじやないでどうか。

中村 距離がありますね。と申しますのは、悉有仮性の方は、人間とか動物の類は仮性を持っているということですよ。けれども、山川草木までは及んでいないわけです。ところが、山川草木まで言い出したのは日本だらうと思いますね。

梅原 あれはいつごろできたんでしょうか。

中村 謂曲なんかに出でおりましよう。よく中陰經といふお經が引かれています。「一仏成道して法界を観見すれば、草木国土悉皆成仏す」といいます。そのお經にすることになっているんだけれども、そういうお經はないんです。大藏經の中にはないんです。ということは、だれか、平安時代だらうと思いますけれども、お坊さんが靈感みたいなものを受けて、こういうお經にあると思つちやつたんでしょうね。

梅原 それは平安時代の文献ですか。

中村 平安じゃないかと思います。奈良時代までたどりますかどうですか。私はまだそこまで文献的に考証しておりますが、とにかくアジア大陸にないんです。やっぱり日本で出たんです。

梅原 出たと思いますね。

中村 それには、日本の風土が美しいということですね。

梅原 草木国土悉皆成仏が、更に山川草木悉皆成仏になるわけですね。

中村 そう思ひますね。

梅原 だんだん成仏の範囲が広がるわけですね。

中村 道元の「正法眼蔵」を見ましても、今おっしゃったような思想でしょうね。

梅原 そうですね。

中村 だから、日本では特に顯著になつて……。じゃ、

なぜ顯著になつたかということですが、風土の美しいことですね。美しい自然に恵まれていることと、狭い島国の中にみんなが住んで仲よく暮らしている。そうすると、自然環境までも大事にしようという気持ちがどこかにあって、その両方が理由じゃないかと思うんです。

梅原 最近、私は神道を少しやつてしまいまして、日本の古代の神道というのは、やはり縄文時代までたどるんじやないかという考え方を持つてゐるんですよ。

中村 そうでしょうね。

梅原 縄文時代の宗教はどこに残つているかというと、これはアイヌとか沖縄とか、周辺に残つているという考え方なんです。そうすると、縄文時代というのは狩猟採

くるんだそうですね。仮装してきて、そして土産を持ってきているわけ。土産というのは、身をあげるという意味だそうです。

中村 そうですかね。土産というのは身を上げるんですけど。

梅原 身をあげるという思想で動植物はこの世にやつてきたのですから人間の方は身をもつて、そのかわり魂を天に送り返す。そういうことだそうです。

中村 なるほどね。

梅原 自分の身を与えて、その代り魂を天に送つてもらうためにこつちへやつてくるそうです。

中村 なるほどね。

梅原 狩猟採集民族というのは、自然の中で生きているわけです。そして、いつも動物や植物の命をとつてゐるわけでしょう。アイヌや沖縄の信仰を見ると、すべての生きるもの全部人間と同じだと言ふんですよ。つまり、熊も木も全部本来人間だといふんです。それらは天では人間の生活をしているんだそうです。それで、こちらに来たときに、熊や木になつて仮装をして

梅原 これは、農耕、牧畜が早く発展した国は、どうしても人間の自然支配の考え方方が強いですね。自然を支配するためには、人間は動物や植物とは違うんだという考え方方が基礎にあった方がよい。いわゆる西洋思想はこういう農耕、牧畜生活の中から出てきた思想ですね。

同じだという考え方、私は、それが基礎にあるような気がして、このごろそう考へているんです。

中村 私は、日本の原始宗教の勉強を特にしたことがないんですけども、ほかの国の民族の原始宗教とか民族宗教に比べてみて、やっぱりおとなしい平和の気持ちに満ちた宗教だったと思いますね。

梅原 そうですね。自然に恵まれた……。

中村 恵まれた……。と申しますのは、ギリシャの宗教は、今パンテオンが残っておりますが、あそこでは、牛だと羊だとかみんな犠牲に供したわけです。神様の前で殺しているわけですね。ところが、日本ではそういう犠牲は余りなかった。

梅原 ないです。

中村 神道の儀式を見ましても、だから、牛を捕まえてきて殺すという儀式は、神道でさえもなかったですか。

梅原 そうです。

中村 それを考え直すまでにかなり時間がかかったといふんですよ。熊が神様で天に行くんだという考えをヨーロッパ人はなかなか理解できなかつた。

中村 そうですね。本当にね。

梅原 犺牲ではないんですよ。

中村 なるほどね。西洋人が見てびっくりしたと、説明を聞いてびっくりしたということはおもしろいですね。西洋人の考え方は違いますから。

梅原 だから、それを理解するまでに大分時間がかかつたといふんです。おもしろいと思いますね。

中村 どこの国でも原始宗教は野蛮だったですね。

みんな牛や羊や馬を殺して供えたわけです。インドだって、もとはそうですよ。だけど、仏教やジャイナ教が起きてから、そういうことをしなくなつたんですね。ところが、日本の神道というは、非常に簡単で、お魚は供えます。あれは取り上げて、ちょっと持つたら死んじやうわけでしよう。それだけのことで、特に殺すという必要はなかつたわけですね。あとは野菜のようなもの、果物を捧げるわけでしよう。だから……。

梅原 ああいうのはもともと全部熊の魂が天へ帰るミヤゲとして持つていったのですよ。

中村 なるほど。そのころの熊というのは……。

梅原 やっぱり食べられる一番おいしい肉を与えてくれるのは神様ですよ。

中村 そうですか。

梅原 だから、一番大きなおいしい肉を与えてくれるのは北海道では熊で、本州では猪だったんじゃないですか。

中村 なるほど。猪ですか。

梅原 猪です。だから、シシオドリというのは、その名残だと私は思っていますね。獅子踊り、獅子まつり。

中村 あれはもとはライオンンじやないわけでしよう。もとは猪ですか。

梅原 猪です。

中村 それに獅子、ライオンという字を当てたわけですか。

梅原 猪です。

中村 なるほど。そうでしょうね。日本にライオンはいないんですから。

梅原 猪と鹿、どちらも獅子といいますね。

中村 あれはどちらも獅子ですね。

梅原 シシというのはアイヌ語で第一の肉という意味です。シビというのが第一の魚。アイヌでは鮭、本州ではまぐろあるいはぶりでしよう。

中村 京都に鹿ヶ谷というのがありますね。

梅原 私のいる近くですけれども。

中村 そうですか。これは一番いいところに住んでいらっしゃる。(笑)

梅原 それはともかく、これからの人類に大変大切な考え方だと思うのです。ヨーロッパ文明は人間と動物とを区別している。

中村 そうです。

梅原 動物を征服することは善である。

中村 そうなんです。

梅原 そうして、そこに科学技術が加わったわけですから、自然がめちゃめちゃに破壊された。

中村 めちゃめちゃに破壊されたわけです。

梅原 それでも人類はやつていいけるのか。僕は、二十世紀はそういう意味で危機だと受けとめますね。

中村 危機がきますね。

梅原 それを解決するのは、本当に自然と人間の一体感。

中村 一体感ですね。

梅原 それが今の形の原神道にあるし、それをもう一遍編成したのが一大乘の思想ですね。

中村 理論的ね。そういうことが言えると思いますね。自然と一体という思想はシナにもあつたと思うんですね。

すよ。「天地と我と同根」とかということを言つていますから、あることはあつたけれども、やっぱり日本の方があそれを余計表現しているんじゃないですか。

聖徳太子の政治思想

梅原 いつまでも古い自然と一体感という思想が残つていたのかもしれませんね。巨大な政治権力ができますと、どうしても人間中心の支配圈をつくります。どうしても人間同士の差別をつくるべきやならんでしょう。そういう意味では、人間と動物の差別という思想は人間と人間との差別に通じます。

中村 そういうことになりますね。

梅原 そういう政治形態が日本では成立するのが遅かつたんじゃないでしょうか。中村 その差別も、余り立てないというのが戦後の日本また一つの顕著な傾向じゃないですか。梅原 そうですね。

中村 いい悪いはまた別にしまして、現在の日本は余り階級の差がないでしょう。だれもが富んでいる。これ

はヨーロッパとは違いますもの。

梅原 先生、私は、仏教が日本に何を与えたかと思うのですけれども、インドではカースト制を打破しようと
いう形でくるわけですね。

中村 打破しました。

梅原 ところが、なかなか打破できなくて……。

中村 できなかつたですね。

梅原 また再びヒンズー教へ戻つてしまつたといふところがあると思うんですね。どうも日本でもそれと同じようなことが起こつたんじやないか。私は、日本の方が階級制の打破に成功したんじやないかという気が……。

中村 そうですか。

梅原 それはどうしてかといいますと、聖徳太子以前の世界は氏族社会ですから。氏族社会で、姓というの

一種のカーストじやなかつたかと思うんですね。

中村 姓ですね。なるほど。

梅原 姓によつてみんな決められている。大伴連何とかといふ、大伴が氏で連は姓、そうすると、大伴といふ

血統と連という身分によつて職業も身分も決められていました。

る。全部姓に縛られているのです。それが氏族社会で、そういうところに律令社会をつくるには、それではとても人材を登用できないので、それで太子は仏教で姓の制約をゆるめて社会を平等化して人材登用をしていく。中村 そうでしたね。

梅原 だから、それを見ると、例えて言うと、これは余り知つていないけれども、例の秦河勝です。彼は造るなわちミヤシコという姓です。ミヤシコなんていうのは、奴隸の姓ですね。秦造河勝というのは、これはうんと低い身分の人間と思うんですよ。

中村 御奴というのは奴なんですね。スレーヴですね。梅原 うんと低い造の人間を……。彼は上から三番目ですね。大仁の位に登用しているんですよ。

中村 人材登用ですね。

梅原 これは、僕はもう平等思想でなければできないと思うんですね。

制を太子は崩壊させたと僕は思うんです。崩壊まではゆきませんが崩壊の基礎をつくったと思います。

中村 そうでしようね。仏教によつてカースト制を打破するという試みはインドでもあつたわけです。マウリヤ王朝が人材登用をやつたわけですね。それを一番徹底的にやつたのがアショーカ王(阿育王)なんですよ。仏教が広がる場合には、必ずカースト制とか世襲的な身分制打破と裏腹の発想です。ただ、インドではそれが永久には成功しなかつたんですね。ところが、日本ではそれが成功したというのは、日本民族が偉かつたのか、聖徳太子が偉かつたのか、両方でしようけれども……。

梅原 同じような人種ですから、どつちも黄色人種ですから、顔は余りかわらんから、おまえ、カースト低いやつだからと、見てもすぐわかるわけですよ。

中村 わからんですよ。

梅原 そこが成功した一つの理由だったと思うのです。だから、平等思想が実現したのです。

中村 実現しやすかつたでしょうね。第一インド人というのは、あれだけの大きな国ですと、色の白い人もい

れば、黒い人もいて、言語が土地によって全然違うわけでしょう。ところが、日本は一つの民族で、一つの習慣といつてもいいでしょう。そして一つの言語で、顔色は同じですからね。

梅原 私は記紀にあるように、日本国家は外からの侵入者によつて作られたと考えますが、侵入者が国を作るときはインドのアーリヤ族のようにやはりカースト制を作ら必要があつたと思います。古代王権をつくるためにカーストが一応できたと思うんです。

中村 そうですね。

梅原 そのカーストを解体させて新しい統一国家をつくる。インドでも仏教が出てくるときは、統一国家が出来る時もある。

中村 これは、もうアジアの国のどこについても言えるわけです。小さな国が統一される……。

梅原 人材を登用して……。

中村 まとまる、合一する。その場合に、仏教がイデオロギーとして採用されるわけです。

梅原 それは氏族宗教じやないから……。

中村 氏族宗教じやないから、それを超えたものとして……。もうこれは、チベットでもそうですし、中国(シナ)でもそうです。それから遼とか金とか、ああいうような異民族でもそうです。それから、南アジアのビルマではアナウラーターという王様が諸部族を統一する。そのときに仏教という……。

梅原 そうすると、四姓平等というのは人材登用にならる。

中村 そうなんです。だから、氏族制の打破と人材登用とは裏腹の関係ですね。

中村 そうだろうと思いますね。

梅原 そうですか。だから、それは明治の政府みたいなものを聖徳太子はやつたんだろうと思うんですね。

中村 廃藩置県ですか、殿様を全部なくしちゃうといふこと、あんなラディカルなことがあつさりできたわけですよ。これは、やっぱり日本に和の精神といいますか、何かそういう差別を立ててはいけないという気持ち、理

解がずうつとあったからじゃないか。

梅原 だから、聖徳太子がそれをここでやつたと私は思ふんですよ。

中村 そうでしょう。

梅原 太子がやつた伝統があるから、明治維新ができるた。

中村 やつた伝統があるからで、あれは大変なことです。殿様というのを全部なくして、そして士族の身分を、名前だけは残したけれども、侍というものをなくしてしまつた。大変なことです。今の日本で一番のがんは官僚制だと思うんですよ。今必要に迫られているんだけれども、この官僚制はなかなか改革できないでしよう。そうすると、それを明治維新のときにやつたというのは大変なことだと思います。それを古くさかのばれば、やっぱり聖徳太子のお手本があつたんでしょうね。

梅原 なかなか大変なことだと思いますね。

先生、十七条憲法に戻りますけれども、儒教は徳の順序が、仁義礼智信でしよう。それを順番を狂わせて、仁礼信義智となつていてるんです。

中村 なるほど。

梅原 あれは何のためにああいうことをしたかというと、私の考え方ですと、信を義の上に置いたんだと思うんです。

中村 信を義の上に。

梅原 そうすると、人間は信では平等関係でしょう。

中村 そうです。

梅原 義というのは上下関係でしょう。だから、十七条憲法を見ると、信は義のもとなりと書いてあるんです。だから、信頼関係の方が上で、身分秩序はその次である。まず人間には信頼があつて、その上に身分秩序があるべきだという、儒教とは違った考えですね。

中村 本当に「信は道のもと(進元)なり」という言葉がありますね。

梅原 だから、わざわざあんな言葉を言うわけです。

中村 わざわざあんなことを言う必要はないんです。

梅原 ええ、言う必要はないんです。

中村 その前に、信というのは、ドグマを信じるという意味じやなくて、真心という意味ですね。

梅原 人間と人間との信頼関係。

中村 そう、人間と人間の信頼関係。

梅原 だから、横の関係なんです。太子は、横の関係を縦の関係の上に置いているんです。

中村 これは今の日本で生きていますね。信頼関係によつて事が動いているでしょう。日本人の間は契約じゃないですよ。かなり大きな企業でも、やっぱり人と人の信頼関係で動いていますものね。

梅原 会社でも身分秩序が先にあって次に信頼関係があるというのは、そういう会社はダメだと思うんです。まず信頼関係があつて、その上で、おまえが課長だ、私は係長だという関係でないと、学長と学生でも、やっぱりきちんと信頼関係がないとダメですね。

中村 なければダメです。
梅原 身分だけであつたら、もう硬直した……。
中村 硬直してしまいますね。

梅原 そうですね。そことところが儒教と仏教の違いだと思います。だから、城ということと都市というのが同じ言葉なんですね。日本社会と中国社会との違いのようないい感じが僕はするんです。

中村 そうかもしませんね。

梅原 あそこで、ああいう思想を持つてきただんですから、僕は大変な人だと思います。

中村 これは、聖徳太子が偉かつたということが言えましようが、同時に、それを実現させるための社会的基盤も、風土に即しています。社会的基盤ができていたといふ気がするんです。と申しますのは、家のあり方がシナと日本じや全然違うんですね。シナへ行きますと、どの家も高い堀で囲まれているんですね。だから、家の中では信頼関係が支配しているわけです。けれども、外からは何がやつてくるかわからないから、高い堀で防いでいるわけです。

梅原 そうですね。町がそうですね。

中村 町もそうです。町も城壁で囲まれています。ところが、日本は家を見ますと、もう空けっぱなしでしょ。ことに田舎なんか行きますと、どこが入り口で、どこが門だかわからない。いろんなところから入ってきまくるからですね。だから、あれでできるんです。

中村 そうですね。町がそうですね。

梅原 あれは何のためにああいうことをしたかというと、日本は家を見ますと、もう空けっぱなしでしょ。ことに田舎なんか行きますと、どこが入り口で、どこが門だかわからない。いろんなところから入ってきまくるからですね。だから、あれでできるんです。

中央アジアの都市は大抵そうだと思うんです。これは日本の特殊性だと思いますね。

梅原 それからもう一つ。十七条憲法の、これもわかつたんですけれども、礼を元と為すというふうにありますね。礼というのは、聖徳太子の考え方でいくと、上の天皇から下の庶民まで全部礼でいこうといらんですね。

中村 なるほど。

梅原 ところが、これも儒教の考え方と思いましたのは、儒教では、「礼記」に礼は民に及ばずと。

中村 なるほどね。

梅原 民まで礼じや無理だと、刑は士に及ばずと。

中村 なるほど。

梅原 上流階級では刑罰はやめる。民は刑罰でびしびしと取り締まって、上流階級だけ礼でやる。

中村 なるほどね。

梅原 それが儒教の考え方です。だから、太子の言うことは、一見は儒教のようで、これは儒教でもなかつた。

中村 きちんと言葉を使いながら、日本的なものに改

めるわけですね。

梅原 だから、山川草木悉皆成仏と同じ思想なんですね。

中村 同じ思想ですね。

梅原 全部仏性があつて、全部礼でいける。だから、囲まんでも……。

中村 囲まなくても平氣だったわけです。

梅原 泥棒なんか入ってこないんだという。

中村 田舎なんかじや、泥棒なんて入ってこないです

からね。もう田舎じや、お互いに人がわかつていて、先祖代々のことをお互い知り合つてるでしょう。だから、もう城壁みたいな堀で囲む必要はないわけです。

梅原 そうですね。

中村 そして、現代にでもその考え方方が生きているというのではないですか。私は実業界のことをよく知りませんけれども、アメリカの実業家が日本へ来て驚くといふんです。日本では、例えば重役か何かでも社員食堂で一緒に食べることがあるといふんです。向こうではそういうことはない。それから、下の社員の言うことも一応耳を傾けるというんです。ところが、アメリカあるいは

はヨーロッパでは大体重役だけで決めてしまうわけでしょう。ほかの連中はとにかく働け、使ってやる、そのかわり賃金は約束どおりやるというバターンですからね。

梅原 日本は身分秩序のきびしい社会だというけれども、それはうそですね。

中村 うそですね。日本は共産主義の国ですよ。これほど共産主義を徹底的に行なっている国はないと思うんです。なぜかといふと、例えば一例を申し上げます。私の友人の大蔵省の高級官僚がソビエト・ロシアへ行きました、「ソビエト・ロシアといふのはいい国だ」という

んです。なぜかといふと、身分制が確立しているといふんですよ。下の者は決して上の人に逆らうことはできません。だから、ストライキなんかやつたら、もう首で

すよ。そして、俸給の差が日本では一番下の官吏と最高の官吏とでは一対十にならないそうですよ。

梅原 そうですか。

中村 ところが、向こうはもうそれどころじやないですよ。何十倍で、しかも高級官吏者だけの通る道なんていふのができているわけでしょう。だからロシアといふのができているわけでしょう。だからロシアといふのができているわけでしょう。

のは、役人にとって、住みいい国だというんですよ。

梅原 先生、この間、徳川時代の研究をしている人が、徳川時代は身分制の社会で、大名は大名で、足軽は足軽だという印象を僕らは持つていたんですよ。ところが、

田沼意次という人間は、もう旗本の中でも下の下、最低の御家人の出身です。それが幕府の最高の実力者になる。

中村 そうなりますね。

梅原 家柄のよい身分の高い大名や旗本では経済政策が出来ない。その経済政策を中心にして実務官僚が出てくる。柳沢吉保が最初です。

中村 柳沢吉保だって身分は低かったですね。

梅原 だから、そういうのがずうつとあって、それが田沼になる。だから、十七、十八世紀の日本といふのは、表面を見たところは階級社会で、実は、どんどん足軽みたいな者がずうつと登用されて……。

中村 勝海舟だって身分にしてみたら……。

梅原 だから、柳沢吉保から勝海舟までずうつとあるんです。ああいうのは不思議だといふんです。

中村 だから、中央政府の官僚といふのは、人材登用

主義だったんですね。

梅原 そうです。幕府でも大名でも、みんな貧乏になつてゐるでしょう。そういうときに実務官吏が出てきて、そういうのが足軽ぐらいの身分から成り上がって権力を持つようになる。

中村 権力を持つ。そういうことはあります。
梅原 だから、そういう上下の変動の激しい社会、そういう社会が日本の徳川時代であった。徳川時代で民衆の一番の憧れは役者と花魁ですね。花魁と役者が一番の人気があつたわけです。ところが、花魁と役者というのは、階級的には一番低いわけです。

中村 階級でいくと、そういうわけですね。
梅原 ところが、西洋だと貴婦人崇拜とか階級の高いのを崇拜する。

中村 そうです。貴婦人崇拜……。

梅原 日本では、一番階級的には低い……。

中村 なるほどね。

梅原 これは、考えてみれば不思議な現象だと思いますね。だから、先生がおっしゃったように、一大乗の国

なのか……。

中村 その方ですね。やっぱり一大乗の国ですね。

梅原 先生は共産主義とおっしゃつたけれども……。
中村 共産主義というのは「冗談」というか、産を共にするという意味です。(笑)

梅原 そこはざううとつながつていていますね。
中村 昔からずううとつながつていていますね。

梅原 聖徳太子から今まで……。

一乘思想と如来藏思想

梅原 先生、今の勝鬘經義疏ですけれども、後半にいくと、勝鬘經の体といいましたかね。体は一乘思想だと。相は何かというと、如來藏思想だと。如來藏思想というのは、煩惱の中に菩提の種が含まれている。煩惱が多いほど、そこに悟りへの種をいつも含んでいるんだ。それは非常にパラドクシカルなものだ。

中村 パラドクシカル、そのとおりです。
梅原 そして、それは信じがたい思想だと……。だけ

じゃないんですね。仏性そのものはあるんだけれども、それに煩惱がまといついている。煩惱の中に仏性といふもの、それを如來藏としてとらえたわけです。これが人間の現実の生きている姿じゃないでしょうか。

梅原 如來藏思想というのは、仏教思想の中で大体どういう形で発展いたしましたか。

中村 大乗佛教になつてから出でますね。

梅原 そうですか。

中村 最初のうちは空觀ばかり説いていますから、空だけ説くわけですよ。

梅原 そうですか。

中村 けれど、如來藏思想といふことを説くようになつたのは、やっぱり勝鬘經あたりが初めてでして、それから大乗起信論ですね。それから如來藏經典というものが幾つかあるんですよ。楞伽經だってそれを受けております。だから、あっちこっちの經典には出でていますね。

梅原 その如來藏思想といふのは、そういう悟りがあるという明るい面を強調する場合と、煩惱にまとわれているんだという暗いところを強調する面とがありますね。

対談—聖徳太子と日本佛教
中村 そうですね。如來藏思想を取り上げたということは、勝鬘經には殊によく出でいますが、仏の法身自体

中村 そうですね。どっちを見るかということ……。

梅原 見るかですね。太子は、どうも煩惱がまとわりついている方を見ている。

中村 そうでしょう。というのは、現実に政治家だつたわけですね。最高の権力者で、指揮したわざですから、嫉妬してはいけないとか、裁判は公平でなければいかんとか……。

梅原 賄賂を取っちゃいかんとか……。十七条憲法はすごいですね。

中村 すごいですよ。

梅原 今でもあれは通用しますね。

中村 十七条憲法を、現代語に訳したものと高級官僚に送りましたら、耳が痛いと言つてました。だから、こういうことなんですね。「人のために官職を設けてはいかん」というんです。「官職のために人を求めよ」というんですよ。つまり、偉いお役人がやめるから、何か公団でもつくつてあげましょう、と……。そういうのはいけないといふんですね。まず公団が必要だったら、じや、そこにだれか適任者を求めよといふんですね。これ

は、今の世の中では、行革の原理ですね。

梅原 僕は、話をしたときに、こんなことを言つたら、やっぱり太子は失脚しますよ。この憲法は非常に厳しくていけれども、これじゃ無理だ。九〇%まで官のための人を求めるよ、一〇%だけは、人のために官を求めるよ、そう言つたら、みんな喜んでいましたよ。それならわれら官僚は救われるよ。

中村 非常にプラティカルな解決方法です。聖徳太子の教えをプラティカルに生かされる。

梅原 だけど、私は、今のそういうプラドクシカルだという大乗仏教は、そういう煩惱即菩提の思想なんでしょうね。そういう煩惱の中に仮性は隠れているというプラドクシカルな説を信ずることが大乗仏教だという。それを太子は他人の問題じやなくて、自分の問題として語つている感じがしたんです。それを読んだときに、何か最澄、親鸞の本を読んでいるような気がした。みんなもう最澄の讖悔ですね。親鸞の讖悔ね。そういう浄土教に近いような、太子は後の日本仏教を先取りしている。片一方で一乗思想だったら、法華經の方へいくし、片一方でいかないといふんです。

方で如来藏思想だったら、今度は淨土真宗の方へいくような、すべて太子の中に含まれている感じがしました。

中村 そうですね。だから、親鸞上人が聖徳太子にもう熱愛しているといいますか、熱烈な尊敬を払つていますものね。

梅原 そういう気持ちがわかりましたね。親鸞は太子の著作を読んでいたかったと思ひますけれども、どうでしょうかね。

中村 いや、全部は読んでいたかどうか知りませんが……。

梅原 読んでいたかしら。もう直観的に……。

中村 直観的に崇拜していたんですね。

梅原 六角堂ですね。最初のそういう女人妻帶のお告げがあつた……。

中村 ああいうお告げがあつたと、あれも本当かうそか知りませんけれどもね。うそだといふ学者もいるんですが、私にはわかりません。

梅原 それは、シンボリカルには非常によくわかりますね。

中村 シンボルですよ。シンボリカルに実におもしろい。

梅原 そうです。

中村 意義深い伝説だと思います。

梅原 愚禿親鸞——僧でなくなつたわけですからね。

僧でなくなった宗教家を探したら、これはもう聖徳太子以外にない。

中村 そういうことになりますね。諸宗の開祖のうちでも、親鸞上人が一番聖徳太子に傾倒していたんじやないですか。

梅原 そう思いますね。

中村 そんな印象を受けますね。

梅原 最澄も尊敬していましたね。

中村 確かに、太子を一番尊敬していました。

梅原 最澄と親鸞が一番きついんじゃないでしょうか。太子崇拜があるかどうかは、親鸞と法然の違いだと思いますね。

中村 なるほど。

中村 法然はないですね。

梅原 ですから、倭国の教主という考え方がないです。

中村 ないです。

梅原 そこは、今の妻帯、つまり、法然はやっぱり最後まで坊さんの立場ですね。

中村 そうですね。聖僧でしたからね。

梅原 ところが、親鸞はやっぱり妻帯した。それで俗人になったといふところに、むしろ聖徳太子を契機にして踏み切ったわけですからね。

中村 そうかもしません。そう言えましょう。あれは道元にしても、倭国の教主という思想はないですね。

梅原 ないと思います。

中村 それから禪宗の偉い方にもない。日蓮上人の場合は、ところどころむしろ批判的でした。

梅原 太子に対して。

中村 はい。

梅原 そうですか。

何か偉大な人の思想心も萌芽の形で、後世発展するすべての思想を含んでいたんですね。

梅原 太子に対しても

中村 どうなんですかね。

梅原 土俗信仰と……。

中村 土俗信仰と結びついているんですね。

歴史家は、土俗信仰を余りそれほど問題にしないですけれども、あれは、太子の日本人に与えた影響ということをたどるために、やはり一応総括的に調べてみるとあるんじゃないでしょうか。

梅原 そうですね。

それから、今の如来蔵という考え方と、先ほどからつながっているんですけれども、そういう如来蔵という考え方方に立つと、先ほどからずっと話しているんですが、何か聖なる世界が人間の別の世界にあるんじやなくて、聖なる世界は俗なる世界の中にいるという考え方が出でますね。

梅原 そうですわ。

中村 ところが、日本人の場合には、聖が俗の中に包まれているといいますかね。

聖徳太子の講經の意味

ということが言えるんだったら、聖も俗も含んでいるもの。だから、如来蔵のようなものといふことになるんじやないでしようか。そういう具合に考えませんと、絶対者というものが説明がつかないとと思うんですね。相対に対立している絶対者といふものはもう絶対者じゃないわけですね。必ず相対を含んでいくものでなければいけない。西洋の宗教思想では、どうしても聖と俗と対立していますね。

中村 含んでいるんですね。本人自身は自覚しておられたかどうかわかりませんけれども、結果から見ると、含まれていたということが言えますね。それから、大工さんだとか職人だとか、ああいう人は、みんな聖徳太子を元祖として拝んでいるというんですね。職人のいろいろな講がございましょう。あれがみんな聖徳太子を奉っていますね。私は、一々そういうことを調べてもいませんけれども、法隆寺が出している「聖徳」という雑誌があるんです。あれは、途切れ途切れに民間の職人なんかに保たれている、続いている太子信仰というのをずうっとたどっていますね。そうすると、意外なところで信仰が残っているんですね。あっちこっちに太子堂というのがございましょう。東京でも世田谷に太子堂というのがありますね。あれは、民衆が太子を拝んでいたんですね。

梅原 それは東北なんかにも太子信仰があるんですよ。

中村 そうですか。

梅原 そういうのは、どうして太子信仰があるのか、よくわからないんですけどもね。

中村 どうなんですかね。

中村 そういうことになりますね。つまり、聖というものが俗と対立してしまうと、もう絶対視じやないわけですね。

中村 対立の一方ですから。だから、もし絶対のもの

梅原 先生、一つ私がちょっとよくわからないところがあるんですけれども、聖徳太子は、推古十三年に、ちょうど今飛鳥寺臺の法興寺の本尊の丈六の釈迦像をつくりました。仏教が新しく変わった証拠にあの仏像をつくって、そして落成式をやったわけですね。それとお父さんの用明天皇の供養とながつていていたみたいなんです

けれども、その供養の話はまた後にして、そこで勝鬘經を講説しまして、そしてその年にまた法華經を講読したわけですね。つまり、講説というのは、勝鬘經と法華經の二經の講説だったわけですね。ところが、義疏をつくったときに、もう一つ維摩經が入ってきたんですね。

中村 なるほど。
梅原 しかも、勝鬘經義疏を先につくって、後から法華經義疏をつくったが、その間に維摩經義疏が入つてきましたね。これは、先生、どのように考えたらいんでしょうか。

中村 そのところは、私はちょっと勉強しておりませんので、何ともお答えできないのが残念ですが、ただ、

このことは言えると思うんですね。帝王が經典をこのよううに講義するということは、南アジアでは絶対ないことです。インドでもないことです。

梅原 そうですか。

中村 つまり、聖と俗が離れているわけです。必ず出家した比丘が説くんです。帝王が講義したという伝説はございません。強いて似たものを求めるならば、シナで

すね。あれは梁の武帝ですか。
梅原 梁の武帝です。

中村 講經の図というのがござります。だから、あのあたりから始まるんだどうと……。

梅原 太子は、梁の武帝を君子の模範にしていました……。
中村 梁の武帝のときには、とにかく大きな版図をすべてまとめたといいますね。文化政策があのとき実現するわけでしょう。だから、それをお手本にしたということは十分考えられます。それから、西洋人に私はいろいろ確かめるんですが、西洋で帝王がバイブルを講義したといふことは絶対にあり得ないんです。

梅原 そうですか。それはおもしろいですね。

中村 だから、これはもうシナに始まって、殊に日本でもパターんとして決まつたわけですね。講經といふことは梁の武帝がやつたとしても、聖徳太子が崇拜の対象になるなどいふことは日本だけですね。

梅原 そうですか。

中村 法隆寺へ行きましたも、四天王寺でも、みんな精靈殿があつて、太子を拝んでいましょう。

梅原 それで、菩薩の天子のまねをしようとする。だから、どうしても經典の講義をしなければならない。それともう一つ頑張って、三經義疏をつくる。だから、当時の思想的状況の中では、太子が二經の講説をし、三經義疏をつくったことを、今の「日出づる處の天子」の、つまり、使者の語った言葉によつても、僕は明らかだと思ふんですね。あり得ると思うんですよ。

中村 なるほどね。これは、アショーカ王なんかと大変違うんです。アショーカ王はインド全体を統一しました大帝王ですが、自分が講義するといふことはないんですよ。非常な権力者でしたけれども、お坊さんにさせているんです。それから、西洋にそれに対応するものといふと、コンスタンチヌス帝がよく持ち出されますが、ところが、カトリックの大寺院なんかに行くと、横の方に小さめのコンスタンチヌス帝の像がちょっとあるんですね。それはつけ足りです。ところが、日本の聖徳宗とか和宗とか、ああいうようなお寺でも聖徳太子が中心である。これは大きな違いです。

梅原 燔帝も經典を講義したといふ話はあるんですね。その話を聞いて、そして太子も梁の武帝のように、燔帝のよくなぞらう經典の講義をしようとした。だから例の、「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致す」という国書を持っていったんですね。妹子が隋に、その時妹子は海の西の国に再びそういう菩薩の天子があらわれたということをいつていてます。再びというのは隋の梁の武帝がおつて、それでまた隋に燔帝という菩薩の天子が出たのは、それに敬意を払いに来たという意味だと思います。

中村 なるほどね。そうかもしれませんね。

梅原 先生、それと維摩經とつながっていますね。

中村 そこが維摩經につながるんじゃないですか。
梅原 維摩經は帝王が經典をつくる一つのアポロギアに……。

中村 アポロギアになりますね。それによつてジャスティファイされる。そういうことはございましような。維摩がとにかくお坊さんたちを前にして説法するわけですからね。これは、聖徳太子のイメージにちょうどながるわけです。これは大乗佛教から始まつたアイデアですね。

梅原 そうですか。

中村 古い時代のテーラガーターだと、ヒーナヤーにはないことです。

梅原 大乗佛教でも、インドではそういう王様の例はないわけですか。

中村 ないです。聞きませんね。それは、帝王の伝説なんていふのはいろいろありますけれども、自分が講義するということはないんです。必ずお坊さんに供養して、そして何か講義してもらつていて。

梅原 維摩は帝王じやないです。

中村 そうですね。帝王じやないです。セイロンのお坊さんなんかにも、私はいろいろ確かめてみましたが、南アジアでは、そういうことはありえないと言えますね。

梅原 そうですか。

中村 だから、これは全く日本独特ですね。そして、世俗の中に宗教が生かされているということになります。おもしろいですね。

梅原 だから、

そういう先生のご説を使って私も考えますと、はじめに勝鬱經義疏を書いて後に法華經義疏をつくるわけですが、その真ん中に維摩經義疏をおいた、なぜそういう本をつくるか、アポロギアをやつたということが考えられますね。

中村 そうかもしませんね。それで、その目で見ると、法華經が違つてくるわけです。さつき申し上げました山林にこもつて、いるようなお坊さんじやいけないといふことを申しますが、法華經を見ますと、一切のもの、治生産業、皆是れ仏法といふことが法華經の中にはいりますね。あれはサンスクリットの原本を見ると、余りはつきり出ていなんですよ。ところが、あの文句は日蓮

上人も大事にされましたね。それで、聖徳太子もあの精神でされたと思うんですね。そこに力点を置いたといふ

ことは、一つの方向づけを示しています。サンスクリットの原典を見ますと、いろいろの職業、世俗の活動があるが、それは根本の道理と背かない。その程度の表現だつたのです。ところが、羅什の訳だと治生産業といふんでしょう。そうすると、もう世俗の職業を全部是認し、

肯定するというところまでいくわけですが、太子はそれを受けて、法華經のうちでも、特にその精神を強調されたんじゃないかと私は思うんです。

梅原 そうですね。

中村 というのは、法華經全体から見ますと、山林にこもることを勧めている教えの方が多いんですよ。私は、原典からそういう印象を受けるんですね。

梅原 「衆生病む故に我病む」という例の維摩經の言葉がござりますね。

中村 維摩經にござりますね。

梅原 あそこは、維摩經義疏の中心じやないかと私は思つうんです。

中村 そうでしょうね。

梅原 結局、民衆の人民の苦しみを苦しみとするから、ここへとどまつた。菩薩のここへとどまる理由は、「衆生病む故に我病む」ということになりますね。

中村 そうです。

梅原 あそこのところが太子の思想の中心ですね。

中村 そう思います。

梅原 これは見事な思想だと今でも私は思つています。

中村 本当に見事な思想だと思います。

梅原 だから、あそこでたしか五重の問答というのをやっていますけれども、あれはやっぱり自己問答で、自分の存在理由をみずから尋ねていると思うんです。これは非常に難しい文章ですけれども、何かそういう太子の気持ちをそこへ入れていきますと、すばらしく生きているんです。ところが、勝鬱經義疏と維摩經義疏は難しいけれども、私は大変感動するんですが、法華經義疏はもうひとつ、法華經はこんなに大きいのに理解は簡単ですね。

中村 はい。要点を突くというような書き方で、偉い

ものだと思います。

梅原 そうですね。解釈として。

中村 あれは、ただ学者がやるよろに全部解釈していこうたら、膨大なものになるだらうと思うんですが、そうじやなくて、中心思想をぱつとついて明らかにする。そういう態度を感じます。

梅原 それは一大乘ですね。

中村 一大乗です。

梅原 それから、三界の譬喻とか火宅の譬喻とか、あの辺がやっぱり太子の仏教にひかれた所以なんでしょうね。

中村 恐らくそうでしょう。

梅原 あの時代にあんなことを理解したというの変なことですね。

中村 大変なことだと思います。そして、法華經といふものは、小乗があつたから、それに對して立場を示すという意味で、殊に迹門の部分は説かれておりましよう。けれども、日本人にとつては、声聞とか小乗というものがピンとこないわけですね。だから、いきなり大乗の思想でいるんですね。

中村 なるほどね。

梅原 だから、これは古事記や日本書紀の基礎になつたと思うんですけれども、太子は片一方でインターナショナルな仏教書をつくり、片方でナショナリズムの歴史書をつくる二つの古典をつくっているわけです。

中村 そういうわけですね。

梅原 それは隋の亡国を見ると、インターナショナリズムだけではやつていけないと……。

中村 そうでしょうね。

梅原 やっぱりナショナリズムが必要だが、日本という国はどういう國かということが明らかになることが必

度をとつてゐるという印象をどうも受けんですが……。

聖徳太子のインターナショナリズム

梅原 先生、三經義疏といふのは、太子伝補闕記によれば、推古十七年から書き始めて、推古二十三年に書き上げたことになるんですけども、そうすると、晩年なんです。太子が政治の第一線に登場したのは、私は推古九年と考へているんですけども、約十年間は政治の第一線で活躍し、そして十七条憲法を制定して、冠位十二階をつくって、日本律令体制の基礎をつくったんですね。それまでは政治家だったと思うんです。

中村 そうです。

梅原 それから推古十七年から彼は思想家にかわったんですよ。

中村 つまり、晩年になつたら、反省期に入ったといふんですかね。

梅原 反省期というよりも、実際は、彼はそれをやり

要だと考えて、両方つくつた。これはもう大変な天才……。

中村 大変なことですね。

梅原 その事実も今の歴史家は否定するんですね。つまり、そういう天皇記・国記・本記をつくるということはありえない。そして、日本書紀ができるのは養老四年、七二〇年なのです。太子が天皇記をつくったというのは推古二十八年、六二〇年なのです。ちょうど百年前なんですよ。太子のつくった歴史書の百年後を記念して日本書紀をつくつたと僕は思うんです。日本書紀が百年前のこときうそを書く必要はない。蘇我氏の滅びるときには天皇紀日記などを焼いたのを、船烹尺が国記をとり入れて中大兄皇子に奉つたとあります。このようにはつきり書いてあるわけです。うそじやないはずなんです。それが、歴史家は聖徳太子を認めようとしないで、それはうそだ

という。それで、聖徳太子が、天皇記・国記を作つたのはうそで、帝記・本記というのが欽明時代につくられたという説です。聖徳太子がつくつた歴史書がもとになつて記紀ができたと、僕はそれはごく当たり前の考え方だと思うんです。

中村 それは非常にだらかな理論だと思いますね。

梅原 津田説は逆さまになつてます。聖徳太子を認めようとしないから、帝記・本記ができるのをうんと前に置いたんです。僕は、文献の時代というのは、やっぱり太子から始まると思うんです。

中村 そうでしょう。そうだと思いますね。

梅原 やっぱり文字の時代にまず十七条憲法を作り経典注釈書を作り、歴史書もつくったと考えるべきじゃないでしょうかね。

中村 大したことですね。あの時代にシナ大陸を往復するなんていうことは容易にできることじゃないのに、向こうの文物を我々の祖先はとにかく取り入れて、漢字といふものが、いつの間にか日本人の共有財産になつてしまつたんですからね。偉いことがあのとき始まつたわけですね。

梅原 あのとき始まつたのですね。

中村 漢字が読み書きできるのは、日本の方がパーセンテージが多いでしょうね。中華人民共和国では漢字の読める人は、パーセンテージで申しますと、比較的に少ないですね。

梅原 空海の将来目録は大変なものですね。

中村 大変なものです。

梅原 あんなに持つてきたんですからね。

中村 国家権力の援助があつたからでしようけれども……。

梅原 あつても大変ですね。

中村 大変なことです。そして、大規模に向こうの文

物をどんどん取り入れて、果ては中国自体に残つていな

いものが日本にはあるというわけでしよう。偉いことで

す。その発端をつくったのは、聖徳太子だということは間違いないでしょうね。

梅原 やつていううちに、もうだんだん聖徳太子崇拜になつてしまつましたね。お札がなくなるのは寂しくて

しようがないんですね。やっぱり福澤諭吉さんには悪いけれども、太子と勝負するのはかわいそうだと思うんです。

福澤さんも偉い人だけれども、太子と比べたら、これはやっぱり違います。格が違います。だから、聖徳太子を守る会でもつくろうかと言つたら、大蔵省関係のある政治実力者が対談のときに、反対せんといてくれという、実は、太子は五万円札にとっておいてあるから……。

いわけですからね。ここまでお隣の文化を取り入れて、そもそも自分のものにしてしまつた。その端緒をつくつたのが聖徳太子だということは間違いないでしようね。

梅原 確かにそのとおりですね。いろんな意味で革命的なことですね。

中村 革命的です。

梅原 遣隋使を出しているでしよう。あれもすごいことじゃないですか。

中村 すごいことですね。今までシナと往復するといふのは、船だったら容易じやないのに……。

梅原 当時の秀才を全部よりすぐつて……。

中村 よりすぐつてやつたんですね。そして、経文とか、そのほかいろいろな道具、文物というものをずつと持つておきました。昔の人はよくやつたと思いますね。自分自身を顧みまして、一遍外国へ行って、どれだけの物を持つて帰れるかというと、ほんのちょっとしか持つて帰っていない。昔の人は偉かつたと思いますね。

梅原 空海の将来目録は大変なものですね。

中村 またご登場願う……。

梅原 だから反対されると困るといって……。

中村 その間、ちょっととご休息になつて……。

梅原 ご休息になつて……。(笑)

中村 それまでまた梅原古代学を大いに発展なさつてください。

梅原 先生、どうもありがとうございました。

中村 ありがとうございました。

梅原 大変いろいろ教えていただきまして……。

中村 私こそ大変いろいろ教えていただいて、楽しかつたです。

(なかむら はじめ・東方学院院長)
(うめはら たけし・京都府立芸術大学学長)